

現在は十八人乗りの小型双発プロペラ機二機態勢だが、今年七月をめどに一機を追加購入する計画だ。

同社が昨年十月、野口観光(登別)と共同で販売を開始した帯広―函館

間の往復航空券と函館・湯の川温泉での宿泊をセツトにした旅行パックは「ほぼ毎日利用がある」(同社)。空路、帯広へ入り、そこから函館へ足を伸ばす首都圏の富裕層が利用の中心と同社は見

ている。ターゲットに想定したこうした首都圏の利用客に加えて、函館や帯広で地元需要をどう掘り起こすか。そこが搭乗率向上の力ギとなりそうだ。

価値の高い商品開発を行っている。同事業をきっかけに両市の研究者の交流も進んでいる。とかち財団職員で同事業科学技術コーディネーターの佐山晃司さんは「函館はお手本。(エアトランセ就航で函館での)会議にも出席しやすくなった」という。

帯広から全国に広がった屋台村は昨年十月、函館にも開業した。屋台村「大門横丁」は二月末までに来店者が十二万人を突破するなど好調で、運営する「はこだてティールーム」の渡辺良三社長は「エアトランセで互いの屋台村を行き来でき

函館と経済交流進む

大門に屋台村 ツアーなど期待

十勝は農業、函館は水産業を産業基盤とし、地域性の違いはあるものの、エアトランセ就航後、共通点が生まれている。函館で取り組みが進む文部科学省の「都市エリア産学官連携促進事業」が

昨年、十勝でも採択された。また「帯広発」の屋台村が函館にも誕生した。関係者は「互いの優位性を取り入れ、地域活性化に結び付けたい」と期待を込める。

「都市エリア事業」は、産学官連携で新産業の創出を目指す。二〇〇三年から取り組む函館では、研究対象のカゴメコンブで化粧品を製造販売する企業が誕生するなど、成功を収めている。十勝では農畜産物を使った付加

価値の高い商品開発を行っている。同事業をきっかけに両市の研究者の交流も進んでいる。とかち財団職員で同事業科学技術コーディネーターの佐山晃司さんは「函館はお手本。(エアトランセ就航で函館での)会議にも出席しやすくなった」という。

帯広から全国に広がった屋台村は昨年十月、函館にも開業した。屋台村「大門横丁」は二月末までに来店者が十二万人を突破するなど好調で、運営する「はこだてティールーム」の渡辺良三社長は「エアトランセで互いの屋台村を行き来でき

るようなツアーができれば」と期待する。ロケ地として人気が高い函館に続けと、帯広でも映画を観光振興の起爆剤にする動きが出てきた。

昨年の東京国際映画祭で四冠に輝いた帯広ロケの映画「雪に願うこと」が四月八日から道内で上映されるのを前に、帯広の経済人が「上映を成功させる会」を設立。代表幹事の川田章博・帯広商工会議所副会頭は「映画を機に、函館の人にもぜひ帯広に来てもらいたい」と意気込んでいる。(上田貴子、田中瑠衣子)